伝兼好筆『伊勢物語』の勘物について

舟見一哉

一、問題の所在

『伊勢物語』の写本には、上欄や欄脚に注記が書き込まれたものが多い。「古今」「後撰」といった集付けや、登場人物に関する伝記などである。この注記（以後「勘物」とよぶ）は『伊勢物語』の読者が施したものであり、『伊勢物語』の享受史・研究史を探るうえで重要な資料となっている。

現在確認されている勘物は、奥書などから、その殆どが藤原定家によって施されたものと考えられている。しかし、定家以外の者の勘物を有する伝本もわずかながら存する。ここで取り上げる大阪府立大学学術情報センター所蔵伝吉田兼好筆本（913.3 I 2-5、大阪女子大学旧蔵）も、そのひとつである。

当該本（以下「伝兼好筆本」と称する）には、およそ二〇〇種類の勘物がある。この勘物については、伝兼好筆本を紹介した大津有一氏 1961 が「伝為氏筆本伊勢物語（稿者注―国立歴史民俗博物館蔵大島雅太郎氏旧蔵本）と一致するものが多く、また中には定家本の勘物と見られるものもある」と指摘しており、片桐洋一氏 1968 にも、伝兼好筆本の勘物のうち「四種」は定家本系統の勘物であり、それ以外の勘物の「大半は、かの顕昭注と言われる伝為氏筆大島本（稿者注―国立歴史民俗博物館蔵大島雅太郎氏旧蔵本）のそれと一致する」との指摘がある。

両氏の指摘通り、伝兼好筆本の勘物は、「大島本」に類する勘物と、定家本の勘物に酷似する勘物とが混在しており、その性格は一様ではない。ただし、いまいちど伝兼好筆本を実地調査すると、伝兼好筆本の勘物は、筆跡からして既に二種類に大別することができる。さらに、その内容も定家本の勘物や大島本に類する勘物以外のものもあり、

筆跡ごとに性格が異なることが確認できた。そこで本稿では、伝兼好筆本の勘物を筆跡によって分類し、それぞれの勘物の基本的な性格について改めて検討したい。

著者の意向により「一 問題の所在」のみ公開